

栃木県

書道連盟

会報

第11号

栃木県書道連盟
木長 宇都宮市今泉1-17-8
〒321 TEL (0286) 33-4063
編集 宇都宮市今泉1-17-8
振替口座 宇都宮4-9017
〒321 宇都宮市東瀬町2039
(会計) 増渕春雪
TEL (0286) 35-3321
印刷 宮本印刷機

平成二年度行事を振返って

副会長 重原聖鳥

本会は、戦後まもない昭和十二年秋に二十数名の有志により発足いたしました。本会は「会員相互の研鑽親睦」を柱に平成二年度総会において決議されました事業を会員各位のご協力のもと活動展開いたしました。

五月、会員展連盟賞に、懸案でありました故川俣古舟先生御遺言による御寄付金運用につきまして協議を重ねました結果、古舟賞を併設することとし、楯を贈ることに決定し、批評会講師石飛博光先生単独審査により、大谷律紫水、大浦涉之・村松太子の三氏が受賞されました。

七月、研修旅行は、「研鑽親睦」の実践そのもので、多賀城

跡・東北歴史博物館・雄勝硯見学の一泊二日の東北路パスの旅は会員相互の親睦を深め楽しい旅となりました。

十月、県芸術祭美術展(書道)は、公募数二八〇点、入賞入選一七九点と地方展では厳しい審査となりましたが、年々質の向上と新人の進出がみられることは喜ばしいことです。

十一月、本会顧問七海水明氏が、長年にわたる本会々長としての功績、地域書道に多大の貢献をされましたことにより、「文化庁地域文化功労賞」を受賞されたのした。誠にめでたいことであり、会員一同の喜びとするところであります。

平成三年二月、女流展は、出品者一〇六名となり質量ともに充実した展覧会に成長いたしました。

二月、実技講習会は、ホテル丸治を会場に催され、講師松下芝堂先生のご熱心な指導は参加者を魅了し深い感銘を与えたことと信じます。

本会が、会員各位のご理解とご協力により地域文化の中に生き続けさせるため、英知を集め、精進を遂げ、立派な本会を形成されることをお願い申しあげます。

会費納入のお知らせ

誠に申し訳けございませんが、会費未納の方は、同封の郵便振替をご利用下さい。

尚、本年度より総会時の会費受付は混雑し間違いのようになりますので、会員全員が郵便振替をご利用下さることをお願い致します。

お願い

なお、寄贈者には収蔵証及び感謝状等が贈られます。

発起人 七海水明 中井史朗
白石宙和 津久井汀舟 生田

目史雲 中野永峰

事務局 321 宇都宮市越戸町四六一 中野永峰 TEL ○

二八六一六一三二九

霞田真齋・川俣古舟・関沢鶴沙

齋藤松雲・石川木魚・大橋尚洞

山崎東道・日賀野東華・宮下竹洞

豊道春海・相沢春洋・諸井華睦

日高秋父・半田神来・鈴木鳴鏑

宇留野清華・鯨島看山・小林翠寛

伊藤伸・濱田庄司・小杉放庵

田崎草雲・清水比庵・半田良平

岡崎清一郎・田中正造・船田中

刑部人・川上澄生・田村耕一

早速栃木県支部収集委員会を発足して、本県書家、文化人から三十名のリストをまとめ、目下鋭意収集中でございます。下記リスト者の書作品をお持ちでしたら是非とも事務局へお知らせいただければ幸いです。平成三年八月末日までに収集を完了したいので、ご盡力をお願い申し上げます。

第41回

栃木県書道連盟会員展

批評会

会期 平成二年五月十八日
五月二十日
会場 栃木会館上・下ギヤラ

批評会講師 石飛博光先生

（石飛先生のことば）今から十一年前、こちらにお邪魔したことがあります。あつという間で、つい二三年前にお伺いしたかなあという感じ、月日のたつのは早いですね。作品の方も相当皆さん方、大飛躍されているのではないかと期待しています。どうぞお手やわらかにお願いいたします。

（窪田連峯氏）墨流しは自分でやられたのかな。洒落た感じで面白い。字のみでなく料紙や墨流し、面白い。墨色の美しさ、形の美しさなど、まぜこぜにした状態で何かいい雰囲気を感じた。こんで楽しんでいただきたい。曹全碑のようで華麗な隷書に入ること。墨流しを薄くした方が落着いたのでは。線は湧えている。（癸生川天遊氏）濃墨、長鋒、よく使われている。字形の崩し方に不正確な面がある。一

本一本の線を大切に。スピードをおとして細かいところをていねいに。構成にはいろいろ工夫のあとが見られるが、後半に高まりを。（木曾梅邦氏）作品なかなかいい。テクニシャン、速書き、近代的、シャープさ、洒落た感じ、深さでている。渴筆部分は遅く、奥ゆき深さでている。感覚的に面白い。運筆を遅く、表現の中でくる。きびしいリズム、いいと思う。（兼目悠久氏）緑なしく、一時期はやつた。最近は大鼓張り、洒落た感じ、現代風。まわりの余白の関係、外の空間あつていいのでは。余白を作り紙面の中の大きな広がり。字を小さくしたらよいのでは。（佐藤堪氏）濃墨は強烈な印象強い。紙面の余白と黒の部分考えたときに、余白を広く、字を小さく紙面構成ができるのではない。白が見られたら明るく広がりがでたのではなからうか。（小森梅寿氏）淡墨でも紙が足りない、まわりの空間不足、さわがしい感じがする。線と余白のバ

ランスが大切だと思う。「自」「法」二文字を小さくすることによって、全体的に逆に大きさが感じられる作品になると思う。（佐藤紫香氏）一点一画慎重に書いている。速書き、流行している作品が多い。じっくり書いた線、気持が落着く。ゆっくり書く中に遅速の変化をもちこんでゆかなければ筆勢が今一つあらわれにくいといえる。遅速の変化をとり入れてゆくと明るくなる。（野中林雨氏）上田、宇野、奎星系統、ちらつと頭にあつて書かれた。先生方の作品をヒントに、自分なりに工夫して作品作りをすることはいいことだ。面白い作品だが、墨のよごれ気になる。印の位置はどうか、これでいいか。右の空間苦しい。もっと小さい印の方がよいのでは。印の位置に工夫を。（篠原松情氏）半切の紙面は難しい。紙面と書かれた字の大きさととの関係、やさわがしい。もっと小さい字を入れることによって空間がひびいてくる。特に小品の場合、余白、字の大きさと紙面との関係、慎重に考えてほしい。筆力あり、手なれた書きぶり。小さい字を入れた方が効果的であつたのでは。（佐野景石氏）篆刻をやっている。

篆刻より書の方がいい。書線を篆刻、印に生かしたら。羊毛使用、筆の弾力性を駆使している。落款も素晴らしい。（斎藤美与子氏）「恵」の心の部分、離れたところ洒落ている。何かおどろきがあることは、作品を作る場合、大事である。本人がリズムに乗って、普通に単調に書くところを離れたこと、ひきつけるものがあるし、書く人、見る人が楽しんで入ってゆける。おどろき、気持の高まりを大事にしたい。（重原聖鳥氏）古くは隷書、いい。ひかえ目な人格、静かなものが表れているような落着いたいい雰囲気だ。作意をこらすのが普通だが、淡々としたもの、味わいがある。（高橋日傳氏）雰囲気、あたたか味があり、真綿でやさしくつつむ雰囲気とてもいい。八丈山人をおもわせる書風でいい。もっと簡素化してゆくと更に心境の高いものができくるのでは。線の省略を追求してみても。（白石宙和氏）童書を思わせる明るさ、こだわりのない楽しさがある。ええ。だんだん下つてきたところ、つまつたところもいい。かすれの中の墨がついたところ、程よく構成されている。（七海水明氏）難かしい構成、全部

の点画をよせ集めてそれをつつの絵にしようという感じ。上部密集、下の広がり、落款も上におさまっている。（中井史朗氏）小さい作品で大きな広がり、のびやかさを出すことは難しい。手紙の筆跡、天下一品、素晴らしい。字の表情、線の深さは見事なものだ。大きな作品はほとんど書く機会はあるが、手紙などまた小さな作品を書きこなす人は少ない。勉強してゆきたい。いい作品だ。（関口恵琴氏）王羲之、鐘繇が、唐晋時代のややつぶれた形、筆法に顔真卿もみられる。古い調子と新しい調子がミックスして工夫されたと思う。楷書は動きの少ない字だが、潤渇の変化、遅速の変化など気持の動きを表現することも可能である。静かな中にも微妙な動きを。（菅又蘆舟氏）徐三庚が。篆刻をやっている。線いい。「曠」の旁少し小さかったのではないか。きたない墨が古さを出している。（早乙女晃楓氏）構成いい。筆力あり。一期一会の「一」が一、三にくる。一が横に並ぶ力を見せた。この構成むずかしい。縦のものにしたら書きやすい。あえて四角の中に書くのは難しい。成功しているかどうかは別問題であるが。（高梨峰鶴氏）一行いい。二行



目何とかがしてやろうという邪念がで、またもとにもどり、三行目ははもとめに入り、ゆらぎ初め不安定になってきた。落款小さく弱い。三行目ひかえ目すぎた。落款ために強く、部分的に墨が入ったらしい。制作の気持の移り変りを作者にかわって説明した。(館沼天游氏) 筆を駆使して見事。走りすぎる傾向があるが潤渴の変化、線のきびしさ、あたかきあり変化をおりませてよく書いている。構成やや問題あり。潤渴いいが一、二行の下部並んでしまったのはおしい。三行目の落款の部、淡々といひ。

力、發揮されている。(手島映次氏) もみ紙のよう、古い紙を使用したのか。(二十年前の古い紙を使用) やわらかい雰囲気です。面白。一字目と三字目くつきすぎ、ニヤミス、字間の空間狭い。「断」少し左へ。線、味わい深いものがある。(津久井汀舟氏) 謙慎系か。思い切った構成面白い。空間構成もいい。洒落ている。(高橋竹瑞氏) いかな作品だ。(漢字は金田心象につき、かなは心象の筆さばきを基にして書いた。) 良寛さまなどいろいろませて作っている。いい雰囲気だ。最後の三行、少し離れた方が良かったのでは。とてもいいかな。味わいあり。

(釣巻大雲氏) 「斜」の偏、一寸おかし。林の中の雨、いい。右の余白広すぎ、少しカットした方がいい。(塚原秀巖氏) 隸書の中に一寸篆意をもりこんだ書きぶりだ。「華」の線、だれてしまった。一番大事なところで工

夫がほしかった。中心が左へ入ってゆくのは不安定、注意して書いた方がいい。(渡辺柳翁氏) 線の切れあり、二、三顆いい。刀意いい。落款もしつかり練習された方がいい。なかなか切れ味いい。(中島鶴州氏) ふわっとしたあたか味のいい線だ。この形の中に詩を書くのは難しい。詩の長さ、紙の形を工夫しなければならぬ。苦勞する場合とうまくいく場合がある。二行の方がもつと力が発揮できたらう。線についてはいいものあり。(成島北水氏) 最近のかなは変体が多くなり使って読みにくくなっている。すっきりとしたオーソドックスな線がゆきとどき、感じいい。きびしい線だ。漢字もやっていてそれが裏づけとなっている。きれいな線だ。文字の大小の変化を工夫してみてほしい。(渡辺竹亭氏) 筆の使い方の基本は穂先の開閉、上下運動である。筆が開きっぱなしで書いている。ひきあげの使い方が入ると明るさ、強さがでる。筆の弾力を生かして、工夫してみては。(中原睦美氏) 洒落た明い感覚的な作品だ。太い線の部分と細い線の部分がうまくあやをなし、美しい模様をこしらえている。現代的新しい感覚の作品だ。構

成的には終りの二行、狭くなってしまう。太細の線で、リズムにのって明るくきれいな作品だ。後半のつまり、気になる。(平石岳城氏) 淡々ときて、「初春の今日ふる雪」ここで何とかしようと苦勞されたようである。他のかなとけあわなくなってしまう。この行だけぎくしゃくしてしまった。「初春」の処理を工夫してはよかった。(中原紅驥氏) 割れた筆をつかって面白いが、最初の部の線の調子と終りの線の調子、気になる。二つのグループのお互いのバランスを。終りの三行、下げた方がよかった。(日賀野琢氏) 謙慎系の作品、伊藤伸系統、筆の腹を使った所多い、がさがさしている。もう少し直筆の丸味の線を主体にしたい。こみ足りない。(古橋洋舟氏) 線はいい。少し小さめの字を入れたら変化がでてくる。巧みな筆さばきで見事だ。(増山恭晏氏) 下部なめ半分たまたま墨含み多くなつた。必然的に、はつきり空間が分れてしまった。墨のつけ方の工夫を。線の調子いい。(藤田和子氏) 淡墨は難しい。潤みの美しさを強調してやると、一寸潤み強すぎ線がはけてしまった。線の輪郭がよくできるように墨の工夫をしてはよかった。渴筆もぐ

ぐつときいてくれればよかった。(本多雨情氏) 金冬心やっている。面白い。ゆつくり書いている。じつくりと書くとき深味がでてくる。落款の調子、勉強を。(室井池水氏) 濃墨でこの形で書くのは面白い。溪口幽城はこのような調子で近代詩文を書いている。長い穂先の筆で墨の入ったところ少し重いかな。筆が少し大きいかな。単調なところもあるが、三行目の上はいい。(築島芳園氏) かなの場合、加工紙を使う人が多いが、素紙を用いて筆力を養うのはいい。二、三行線が弱かったが、しっかりと勉強するように。(吉田景堂氏) 勝手流でゆか、見る人の立場を意識しての制作の接点難かしい。勝手流で書きすぎると一つのわいからはみだしてしまつとまずいのではないかな。成功しているかどうか疑問だ。元に返ってじっくりとした自分なりの構成を勉強してほしい。筆が立っている。(村松太子氏) 頑張っている。のっている時だ。曲線が気になる。直線をびつとり入れると引き締まってくる。線は文句なし。くねくねしすぎのりすぎ。「照」いい。「光」工夫を、どこかに直線を。一寸不満ある。(山下スミ氏) 手島系、異端児的な作品だ。精神をくんでやる

んだ。そして表現することは別だ。自分の書を追求してゆくんだという姿勢はいい。作品にあらわれている。渴筆の線いいものあり。(矢内竹華氏)おっとり、静かな作品。情景表現の試みも面白い。ゆっくりの中にも遅速の変化を加えることによって線が生きてくる。水をやりすぎ、根が腐りそうな感じ。(矢内親風氏)堂々とした書きぶり。いい。「峰」を書きさかしたのだから、逆にひかえ目にしたらよかった。全体の中で調和させること、頑張りすぎた。少し押さえたなら、一寸渴筆を。(吉田芳洞氏)落款、弱い。本文と落けあうように。印を押し終るまでが作品制作だという気持ちで、残念、考えるように。(赤澤豊氏)なかなか線の冴えあり、この中でこの構成なかなか洒落ていい。落款が一寸調子違う。大切にしてほしい。いい線、下の三文字さびしい。(新井幽秋氏)大和古印風の調子いい。石井雙石系、静かな調子の印、少ない。「山静」特にいい。風格あり。(新井幽石氏)うまくびしっと収まっている。印の押し方、気にしない。冠帽印少し離したら(荒牧桂舟氏)紙面と大ききの関係、もう少し小さくした方がいい。「遊」大きいかな、大き

く強すぎたので、雲がとんでいてしまった感じ。(井澤桂秋氏)「家」の形、あぶない。リズムいい。空間に気持が働いている。せっかちなところあり。気持を落着けて慎重に書いたら、大胆なところは大胆に、静かなところは静かに、めりはりを考えて。(砂山公子氏)精膽気合が入っている。筆が可哀想、筆は適度にいじめるように。筆にまかせて書く部分もあつていい。全体に暗くなるから筆をひきあげて軽やかに。(石川六濤氏)独特で面白い表情だ。「玄」何とかしたいような気がする。作意的にするのもどうかと思うが、ひびきあい、呼応しあうことが大切だ。(石田鶴郷氏)手紙、はがきなど書くとき、だんだん書くに従ってつまってくる。最初からびしっと収めるやり方が一般的であるが、書きだしていったんだん小さくしていった収まってゆくという自然体という形の作品作りも面白い。二行書きの場合、字数の計算あつてもよかったのでは。後半窮屈。つまりすぎ、無理に収めた(石川善克氏)見事。最後の右払い気になる。落款がばけてしまった。「雲」までいいが、やや堅くなつてしまった。(猪瀬苦吟氏)「鹿鳴」篆書の場合、時間

をかけてやらなければ、筆の使い方、字形のとおり方など独特な難しさがある。線の調子、篆書の筆意などまだ専門的にやっていない。終筆に問題あり。(岩澤松濤氏)線が多い、字が一杯あるなあ。字粒を小さくする、小さい字を入れるかするとよい。(上野鶴陽氏)竹風はいいが、一行から二行、二行から三行への気持とぎれてしまった。つながり大切に。(江本ちゑ氏)意識しすぎるとその部分だけ特別に目立ってしまう。全体の流れを意識した中で仕事をするといい。あはれすぎ強調しすぎた。問題だ。(大谷津紫水氏)淡々と書いてゆきながら意匠をこらし書いてゆくのは好きだ。「ふくらふとん」のところで盛りあがりを作っているが、墨量を少なくするか線を細くするかするとい。他はいい。(大浦舟人氏)いい仕事している。小林斗盞系か、上の印、二字目の下部線(覧)気になる。(池澤畔蒲氏)対角線に字を配すと空間が切られた感じになつてしまふが、ごく自然に収まっている。落款本文とあわない。(小倉溪峰氏)字から字へのつながりの線を考えてほしい。はねたらそれで終りというのではなく、次にゆくためのはねであるから、

ここを意識しての終筆でなくてはいい。(大島静彩氏)「雨」堅い、さらりと書いた方がよかった。「月」もかすれをだすと余韻がこつて、ほんわかといふ気分に見られたと思う。(川上尚雲氏)二十代の水々しさあり、きれいな線、生き生きとすつきりとしている。(加藤榮舟氏)「盡」「楽」よい。「人」二画面のひねり残念、すかつと書いた方がよかった。(嘉久和尚道氏)筆が割れてしまった。だましまし書いている。筆の丸味、からみほしい。側筆ぎみの線が多い。(乙川玄洞氏)字と字をからみあわせたり、線の方角を色々変えたりして変化をつけるとき、全体として構成しようとしている場合、線のつながりを大事にしてほしい。線と線、字と字がばらばらになつてしまった。リズムにのつて書いてほしい。(川上大岳氏)左手で書いた作品、線しかりしている線の調子いい。紙を四角か、横長にしたらいのでは、右の余白ほしいなあと感じる。(川合巖山氏)最後の空間処理が大事である。前半のグループは決まったが、落款を本文にあわせて太細をとり入れ、本文の線と落款の線を処理してほしい。筆(小)が違ったから調子が変わ

った。線の質が変わつてしまふと問題だ。一と二のかたまりいい。

(批評の終りに)

個々の作品を見て、小品、手軽に中途半端、気持の上での安易さがでてる。このぐらいのサイズは難しい。技量もはつきりとあらわれてしまふ。気持をこめて書きこんでほしい。紙の大きさと字の大きさととの関係、しっくりこないのが気になつた。落款の小さい字、気持をこめて書いてほしい。この地区のレベル、高いと感じた。お互にいいところをくみとりながら研鑽してゆくと、栃木独特の書が期待できるいい点がでてるだろう。

(文責・大谷津)

編集後記

諸先生方にはご多忙のところ寄稿のご協力ありがとうございました。尚、なれない者がやっておりますので、ご意見、ご希望等、ございましたら、一報下さ

大谷津紫水
久津美碧洋
癸生川天遊
赤澤 豊

連盟古舟賞

お札のことば

大浦舟人



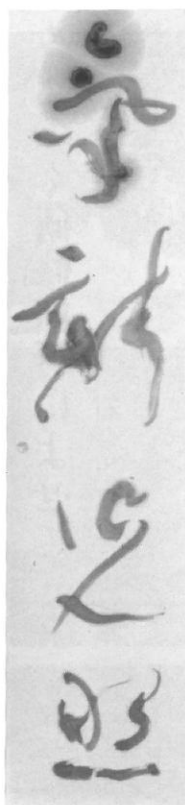
第一回川俣古舟賞の受賞という榮譽に浴し、感謝の気持ちと心引き締まる思いでいっぱいです。近年、篆刻人口も増え始めましたが、漢字による書表現の魅力ある分野として、作家が研鑽すべきことは、まだ山ほどある様に思えます。

今回の「疎（躋）覧」は、高い所にのぼって眺めることですが、眺望できる所まで道程はまだこれからです。どうぞ、これまでと変わらぬご指導をよろしくお願いいたします。

御 禮

村松 太子

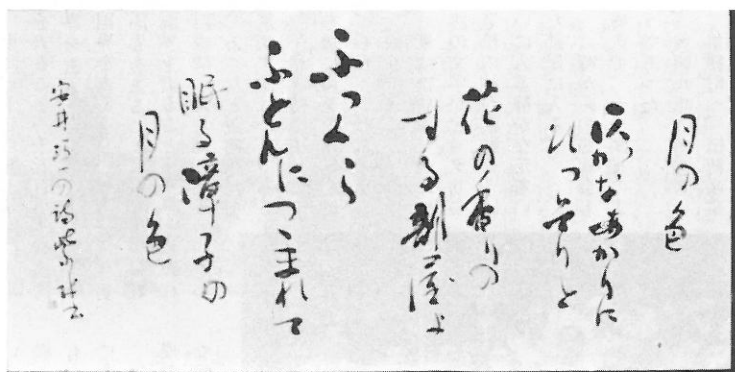
ありがとうございます。
賞を戴けると思っています。
師山崎大抱に、常に無欲で



と言われていました。その師は、この一月末、他界しました。批評会で、石飛先生は厳しく、勉強になりました。一年を経て、今、また、気新光照の季節です。かんばろうと思えます。

連盟賞受賞に際して

大谷津 紫 水



この度は、栃書連賞、第一回川俣古舟賞をいただき誠にありがとうございます。突然の入賞発表におどろき、鼓動の高なりを覚え、ました。今回の作品は、秋田県出身の作家安井巧一童謡詩集「山のさくら」よりえらんだものです。純真無垢な世界を、素直に、ごく自然のタッチで、ふんわりと、あたたかさ、静けさ、明るさを表現しようと試みました。まだまだ未熟ですが、これからも自分自身の世界を深めてゆきたいと願っております。会員の皆様方のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

みちのく研修旅行によせて

石川 六 濤

旅は大好きである。煩わしさから離れて、目新しい風景のなかに自分を投げ出して、漠然とした期待を持って歩く。

川のある町、畠々と遠嶺が見える町、広漠と広く流れ飛ぶ雲、そして日の出と落日の見える町、これらの条件の一つでも触れることができる旅であれば満足である。

そして、旅は新しく自分を発見できる唯一の機会でもある。だから万障繰り合わせ参加することになっている。

今回の度は、七月二十二日から二十三日一泊二日の栃木県書道連盟会員同好の志の旅であるので、喜んで参加させて戴いた。参加者は三十六名、一台のバスに結構な人数である。

白石会長は、残念ながら健康が優れず欠席、重原副会長と赤沢幹事さんの引率で、賑やかに全員和氣霽々と乗車、午前八時、専用バスは東武宇都宮西口を出発する。

今回参加申し込みをされてから、平石岳城氏が急死されて見えず、作製された名簿の記載氏名が、オーバーラインで訂正さ

れているのを見て、しばし哀惜、誠に残念である。

往年の旅行のときは、いつも賑やかに彼独特のウイットのある話題で、旅行を盛り上げてくれた彼の面影が一瞬頭をよぎる。

栃木県から福島県境の丘陵地を走り抜ける。

車窓に見える七月の緑は濃く、その深奥に遠く望見できる藍色の山肌を雲の影が、より濃く染めて、更に深遠さを増している。進路はこのあたりから更に一段と魅力を増して行く。

盤梯山系、吾妻山系、蔵王山系と、まさしくみちのくの旅の大丁場である。

特に安達良は、若い頃高村光太郎の智恵子抄にすっかり魅せられて、小学校五年生の長女を連れて登山したときのことか思い出される。今その娘も大学受験を頭に三人の子持ちである。

人間とは勝手なものである。一途に憧憬した光太郎も、亡くした悪女房への思慕の情念を断ち切れず、それに埋没して、人里を離れた山間に逃避して、一切の芸術活動を捨て去っている。

私の考えたひがみか、どうも昔ほど高く評価べきでない私になっている。

車窓は走馬燈の絵のように、絶えず目新しい風景画を飾っている。

すっかり同化した会員は、幹部の入念なお世話で、食べる、飲む、唱う、和氣霽々である。

午前十一時に青葉城に到着。ここから眺める仙台市はまさしく東北随一の都市である。どっしりと落着き、水量のある川を配し、緑も多い、短かい時間での写真撮影を終えて、いよいよ目的の多賀城へ向う。

午後一時五十分多賀城跡、東北歴史館に着く。立派な近代建築である。約九百米四方の敷地を持つ堂々たるものであり、此の地方の古代文化遺産をはじめ一般民具等も陳列されており、軽視していたわけではないが、改めて深い感銘を受ける。

多賀城跡は、幾つかの小高い芝丘の間の窪地の鞘堂に建っていた。木陰で古い建物の中で、そのうえ見ようとする人達の後から覗き見る私には充分な鑑賞はできなかった。

印象として碑文からは強い感銘はなかったが、朽ちた土塁を廻した庁殿遺跡の高台に立つと、さすがに悠遠な古代の住時が偲

ばれ感無量であった。

更に、千二百七十年前に、京を去ること一千五百里、蝦夷国界を去ること百二十里、常陸国界を去ること四百二十里、下野国界を去ること二百七十里、靺鞨国界を去ること三千里と云われた当時、東北地方の政治の中心であったと説明されて驚嘆するばかりである。

午後三時二十分ここを後に塩釜魚市場を経て松島へ、松島ホテル大観荘に入る。

東に松島湾、西に松涛の文字がピタリのお松の林が視野いっぱいに入る静かな落着いた部屋に入る。

六時からの懇親会も盛大で、充分満足のようであった。

翌朝八時に宿を立つて雄勝町へ、伝統産業会館で、硯について見識を深め、高橋頼雄君（現松島堂勤務）の実家である高橋硯店に寄る。

大いに歓迎されて大値引きで硯を買い込んだ会員も多かったようである。いや硯ばかりでなく、今回の旅は何

か大きく心を満たすものをも買い込んだようで、いづれの顔も満ち足りた表情で、帰路の車中も心を開いた語らいで大賑わいであった。

午後七時四十分無事宇都宮に帰着し、第三回研修旅行は大きな収穫を得て終った。



松下芝堂先生をお迎えしての実技講習会

吉 田 景 堂

本年度の実技講習会は、愛知県津島市より日展評議員、松下芝堂先生を講師にお迎えし二月十七日(日) ホテル丸治にて開催された。

先生は、鈴木翠軒先生直系の逸材として早くから名を知られるとともに、現在千紫会会長として一門のご指導にあたられている。

県書道連盟会長白石先生のご挨拶の後、千紫会副理事長中野先生より講師のご紹介があった。そのお話の中で、先生は大正十五年三河のお生まれであり、三



十八歳で日展審査員にご就任になられたこと、翠軒先生畢生の名作「万葉千首」の料紙をご制作になられたことが特筆される。つづいて講習に移る。初めに

用筆と書について話された。「これまで三年周期で迷い続けたが近頃は迷わないで出来るようになった。特に起筆が大切であり、起筆により生まれる線というものは円に深くかわって右回り左回りいずれも自然に円弧となる。つまり書に限らず芸術作品といわれるものはすべて線より成り立っている。その線は

円の一部であって宇宙と同じ働きを以ているのである。それが書の宇宙観である。人体も自然も宇宙も皆一体であり、宇宙が円いということと関係している。体は宇宙の原型で全体で書くことが天地を字ぶことなのであり、宇宙に自己を預けるということなのだ。体全体で書く、そして良い筆の入れ方をするので書いて良

いものがふと広がって、豊かなものができることにつながっていくのである。」ということと話された。そして実際に模造紙に大きく朱書され用筆を示さ

れた。

その後、本日の課題である空海、三十帖策子の臨書に入られた。特に二十七帖の最も生動

感溢れる部分を選ばれた。これは密教の経論等を入唐した空海が書写したもので、主に行草体で次々と書かれたものである。

先生は大判の半紙に二文字ずつやや淡めの墨で書かれた。その筆遣いは実に自然に楽々と伸びやかなもので精緻を極め、しかも豊かで構えが大きいのである。先生のいわれる天地と一体の自然な用筆とはまさにこのことであらう。皆じつと目を凝らして見守っている。先生は精力的に次々と臨書され、参会者のために全員に一人ひとり一枚ずつ書

いて下さったのであった。午前より約三時間熱気の中で参会者それぞれ三十帖策子を習い添削助言等指導を受けた。

最後に、先生が模範揮毫として実際に作品をお書きになるところを見させて頂いた。臨書の精緻さとは一転して目にもとらぬほどの筆技は何ものにもとらわれぬ自由なものであり、いわゆる翠軒流の真髓を披露され、まことに真のプロ作家の醍醐味を観る者に堪能させてくれた素晴らしい機会であった。先生の至芸を目のあたりにした我々に深い感銘を残して下さったのである。

閉会の後、懇親会に及んだが先生の酒を愛し飾らない気さくなお人柄に皆心惹かれ、和やかに歓談の尽きることがなかった。先生はふだん陽気に過ごされるが、こと書に関してはまことに厳しく自ら書いて書いて書きまくられる芸道一途な方である。栃木書壇に春風を送って下さったことに深く感謝しつつペンを置く。

(吉田景堂記)

第八回

栃木県書道連盟女流展

平成三年二月十五日～十七日
栃木会館 階上ギャラリー

年一回の女性会員の作品発表と親睦の為の展覧会も、今年は八回を迎え、小雨降る二月十五日に開催された。出品点数は一〇六点を数え、女性会員の六一

%に達したことは喜ばしい限りである。作品の種別はかな二〇%、近代詩文七%、漢字四五%、少字数二五%、一字書三%、計一〇〇%で、漢字が圧倒的に多

かった。又創作意欲が旺盛で臨書作品が少なかったのも目についた。

盟会員の御観覧をいただき盛會に終ったことは、皆様のお陰と心から感謝している。特に初日には白石宙和連盟会長の御来展を賜わり懇切丁寧な御指導を仰ぎ、これからの書活動に一層の意欲が持てたことは有難かった。

扱って御観覧下さった先生方の御講評を総合すると、

(一) 作品は大変良く書かれていて、墨色、文字の大小、紙面構成の配分、落款印の位置など、それぞれ考えて勉強の跡が見えるが、もう少し冒険的作品もあつて欲しかった。何となくおとなしく、まとまり過ぎているようだ。

(二) 行草の作品が多く、臨書、楷書等の古典への追求発表作が少なかったのでは。

(三) さすが女流展だけあって、かな作品、かな交り作品が全体の1/2を占めているのは見事と思う。

(四) 連盟展という事もあつてか、

いろいろの形態の作品を楽しく観ることが出来た。等々。

今回は十七日の日曜日が、丁度連盟の実技講習会開催と勝ち合ったので、作品批評会を取り止めたのは残念だった。

この会は特別に賞を出さず、お互いが励まし合おうという親睦の意が多分に含まれているので、常日頃やつて見ようと思つて、思い切つて打ち出して見る冒険の機会に恵まれていると思う。然し、これは会場の都合上作品寸法の限定もあつて、中々むづかしい課題である。私達は諸先生の御言葉有難ういただき、内容の充実、質的向上に努力するよう益々書活動に励みたいと思う。

年毎に盛大になる女流展も、一重に連盟会長初め、諸先生の御協力の賜ものと厚くお礼申し上げ御報告の一端とします。

(小滝きみ)



第四十四回県芸術祭

七海 水 明

展示されたのは、総出品二百八十点の中、百七十九点、五七%であった。会場に入って感ずることは、字数の多いもの少ないもの、女手といわれるにふさわしい仮名、ばんと一呼吸でもにした一字書等々の力作が壁面狭しと並んでおり、その多様さという点であろう。色彩と言えは極めて単純で黒と白だけ。そして地味な雰囲気だが、立ち込める熱気は肌にしみこんでくるようだ。

文字だから「何と読むのか」と思うのはごく自然の心である。作者にとっては入落ということが頭から抜くことの出来ない宿命の中での仕事である。書は線の芸術だともいわれている。どういふ線がよいのかについては、一つや二つの基準では決定出来ない。これという線を書くのには、どういふ技法をもって対処しなければならないという創の探究に迫られる。

県芸術祭の場合は一つの登龍門といわれているし、一般にも知られているようだ。基本的な表現技術のいかに第一に問われる。加えて内容と表現との融合の度合いがある。何をどう書くか作るか写すかなど考えると

他の部門にも通ずるようだ。

漢字作品が全体の三分の一を占めている。多字数作品に挑戦する姿が目につく。四行もの、五行ものに取り組むことはまことに雄々しく美しい姿である。しかし、字数だけではどうにもならない。二つも三つもの漢詩を一幅に並べて書く以前の仕事があるはずである。このあたり

に思いをよせることも欠くべからざる資質といえる。

昨年に比しやや物足りなさを感じたのは、一字一四字のいわゆる少字数部門である。特に何をどう書くかの何ということへの心づかいが足らなかったようである。したがってどうという表現の方法がしっくりしないということになるわけである。

かな作品二十八点という数を見せられているが、古典研究への志向があり、大事な仕事をしたいと思うし、美しい料紙への関心があるが、われ心を洗われた。大字かなの場合はかなりの技術と作品としてまとめることへの広範囲の視力と創意がなくてはなるまい。この分野により深い開拓の気概がほしいものである。近代詩文書は、わずかに七点とさびしい話である。中央の

師についている人は師風により容易のようだが、漢字とかなの調和ということでは、幅広い技術を持つていないと中々むずかしい。読み易い、読めるものをと出された近代詩文書の身には、や岐路に立ったかと思われるものがうかがわれる。自作の詩、文、句を書くことが出来たら、もともと誇りが持てるし楽しい仕事になるのではなからうか。

篆刻は十一点だが、出品の数は年々増えている。この仕事への関心が非常に高まりつつあることは喜びである。しかし、その刻並びに落款などからしてこれからだという感を深くした。

ここで忘れてならないことがある。それは墨色ということである。墨はただ黒いだけでも墨への思いが不十分だということになるのではなからうか。一字書、少字数書、かな作品はもちろん多字数作品についても反省と研究の要があることを考えさせられた。なお、もう一つつけ加えるとすれば、落款、雅印についてである。この二つも本文の一部と考えることが大切であろう。締めくくりであるから心をこめ適切な位置におくことが作者としての心すべき一事である。

以下総出品二百八十点の中の受賞作の八点について寸評を記

してみよう。

◎芸術祭賞 篠原珠篁 初夏二題(其の二) 他一首

かなり慎重な心遣いであるが流暢な流れの中にぐいぐいっと節をつけ、今まで見られなかった新しい境地である。小手先の技術から脱出し一つのゆとりを蔵した良い作品である。上半分が特に光っている。

◎準芸術祭賞 鈴木源泉 王維詩二首

多字数四行もの。手馴れた独特の手法で極めて自然に恬淡とした心情を内に秘めている。やわらかく、あたたく、各字の構成に無理のない流れの中でゆとりを見せている。

◎準芸術祭賞 川内昭子 島本赤彦の歌

達筆である。どの字も縦への流れに乗っているが、横への張り出しが少し足らなかったようだ。章法は中々妙を得、余白の美しさはさすがで格調の高い作品である。

◎芸術祭奨励賞 岸 豊水 七絶二首

一つの技法を確かに手にしたといった感じがする、おごらずあせらず、ひたすら思いを深めているといった姿の作品。一つの個性の表現とも見得る。しかし、この個性はさらに展開されていくべきものであろう。

◎芸術祭奨励賞 荒牧桂舟 百

事不関心独静

練度の高い線で各字の構成など極めて自然でゆとりのある作品。しかし、筆をおろす前のどく書くかの段階において想の練りが足りなかったことが静の過大にうかがえる。

◎芸術祭奨励賞 及川紫峯 可運筆のリズムも一つの型を得た中々の秀作。慎重さはいいが高じて硬さとなり乱れと誇張が終筆に出たことは惜しいことだ。

◎芸術祭奨励賞 中原陸美 海の族

近代詩文書の一つの型を一応踏まえてはいるがまだままだの感がある。とはいってもこのこまで究め得たよろこびは貴い。筆さばきの見事さがこの作に若さ

と明るさを与えている。

◎芸術祭奨励賞 大浦舟人 天龍(篆刻)

方寸の世界に踏みこんで十年に近いとか。さすがに常石を踏まえての刀さばきを見せて見事である。しかし、功をあせてはなるまい。龍の構成には無理はないか。中央部の密度が気になる。白印のへりに誇張はないか。筆による落款にも心を寄せたいものである。

顧問 七海水明先生

地域文化功労者 文部大臣表彰

「祝賀会 盛大に開催さる」

久津美 碧 洋

顧問七海水明先生には、平成二年度の文化庁地域文化功労者に選ばれ、文部大臣表彰を受けた。この名誉ある受彰を、会員みなで祝い申し上げようと十一月二十三日、ホテル丸治に於て盛大に祝賀会が開催された。

地域文化功労者とは、芸術文化の振興や文化財の保護など、地域の文化の振興に大きな功績があつた者を文化庁が選り、文部大臣が表彰するもの。先生の今回



の受彰は、永年に亘り県書道連盟会長という要職にあつて、県下の各種団体の書活動を地域文化の興隆にとの大きな視野に立つて、連盟の組織強化と拡充を推進、さらには県芸術祭運営委員、審査員、文化協会理事などを歴任しながら、地域文化発展に精魂を傾けられた大きな功績が認められたものであり、私達会員にとつても大変嬉しいご慶事であらう。

うと参加した会員一二〇名余り、七海先生のご入場を満場の拍手でお迎えし、午後四時癸生川天遊氏の司会で祝賀会の幕を開けた。重原副会長の開会の挨拶、白石会長が祝辞を述べる。淡々とした口調の中にも七海先生への心からの祝意がこめられ、今回の受彰が、同じ道を歩む同志にとつても限りない大きな誇りであり喜びであると締めくくられた。次いで来賓の県文化協会副会長飯田実氏の祝辞、参加者

からの記念品贈呈、花束贈呈と進んだ。愈々当日の主役七海先生が会場割れんばかりの拍手に応えられて登壇。昂まる感動を抑さえられていたのか如く淡々と謝意を述べられた。「今回の受彰は私個人のものではない。今回の受彰の対象となった諸々の仕事は、副会長をはじめ役員の方々や会員全員のご協力応援があつたらこそ出来たことです。自分一人が骨を折ったわけではありません。心温かいよき書友に恵まれたからこそ出来たこと。その意味で、今回の私の受彰は皆さんのものです。」と。

この度の大きな受彰を誇示することもなく、懐深く謙虚に受け止められている心情を普段の先生その儘の朴訥とした口調で述べられた。その姿は、実に印象的であつた。

高橋日傳先生の首頭で乾杯して祝宴に入り宴は最高に盛り上がる。七海先生は参加者一人一人に足を運ばれながら「有難う」「有難う」と気さくに声をかけられる。忽ち先生を囲んでの数人の輪が出来、その輪が次から次へと移動する。何時も心温かく飾り気のない先生の祝宴というにふさわしく、会場一杯が和みの経つのを忘れさせた。午後六時、斉藤副会長の「七海先生

の益々のご発展を祈念すると共に、今回の先生の受彰を私達の誇りとして、連盟の発展に頑張ります。」と挨拶で閉会した。

連盟の会長として、永年に亘ってひたすら重責を全うされた七海先生、自由で枯淡・創造性豊かな作品を常に発表される先生、流派に捉われず誰彼となし親しく声をかけられる先生、そのお人柄が会員から親しまれ尊敬され、この様な盛大で楽しい祝賀会となつたのではなからうか。先生本当にお目出度うございまして。

お知らせ

数年前から計画されてい
ました「栃木県書道四〇年
のあゆみ」(約一五〇頁)
が、みなさまのご協力によ
り、まもなく完成間近とな
りました。その時には会員
全員に配布する予定です。
もうしばらくお待ち下さい。

平成二年

五	一八・二〇 二〇	会員展 栃木会館上・下ギャラリー出品点数一八二点。 会員展批評会 講師、創文書道会理事 石飛博光先生。 連盟古舟賞受賞者、大谷津紫水・大浦舟人・村松太子。 総会 ホテル丸治 出席一〇四名 議長 石川六濤。 会長白石宙和 副会長齋藤笙風 重原聖島留任。 懇親会 ホテル丸治 出席七十七名。 顧問会 （下野の書展・連盟運営・県芸術祭、審査員、招待作家、実行委員選出について）。
六	七	七海、中井、白石、斎藤、重原出席。 第一回幹事会 ホテル丸治 出席十二名 ○地区代表委員会○研修旅行○県芸術祭入賞入選者のつどい ○実技講習会○女流展○平成三年度会員展総会等協議。
六	二二	第一回地区代表委員会 ホテル丸治 出席二三名。 幹事会での協議事項を中心に本年度事業について協議。 県芸入賞入選者のつどい会費六千円。実技講習会講師、日展審査員松下芝堂先生。第二回地区代表委員会を平成三年四月頃。平成三年会員展講師。会費未納者の処置について等協議。
七	八	研修旅行について事務局打合せ、ホテル丸治 研修旅行 参加三十六名 多賀城跡、東北歴史博物館、雄勝硯見学。詳細別記。 第十五回下野の書展打合せ、ホテル丸治、出席者十九名。 ○記念展特別選考により新代表作家に齋藤笙風・木曾梅邦・村松太子選出。
七	一九 二二・二三	○選考委員、七海水明・酒井真沙・佐藤堪・田島芽甲・沢田寛 ○賞の名称、下野書展賞川俣古舟賞とする。
八	四	
五	八	第十五回下野の書展、東武デパート五階催事場。 下野書展賞川俣古舟賞、塚原秀巖・鶴見農浦・山田雅子受賞。 第十五回下野の書展記念講演、ホテル丸治 日展評議員津金孝邦先生、「書と書道について」盛会。 顧問会長副会長会 ホテル丸治 新墨のころ五〇名選出協議。平成三年一月一日下野新聞掲載。 荒井雅子・大谷津紫水・大浦舟人・石川六濤、齋藤美与子選出。 第二回幹事会、ホテル丸治、 出席者、白石・重原・赤澤・増渕・松本・癸生川・岸。 ○研修旅行報告、○県芸入賞入選者のつどいの係分担○実技講習会内容○会員展総会の日時検討。 県芸術祭審査会、県立美術館 審査員、赤澤豊・酒井真沙・齋藤笙風・白石宙和・田島芽甲・百目鬼賢・七海水明。 公募数二八〇点、入賞八点、入選一七一点、入選率約六三％。 県芸術祭美術展、日本画書道開催、県立美術館。 県芸術祭入賞入選者のつどい ホテル丸治、 出席者一二四名、来賓三名、盛会。 第八回女流展打合せ、ホテル丸治、 出席者、重原・赤澤・増渕・荒井・齋藤美・齋藤和・小滝・山下・人見。 七海水明先生「文化庁地域文化功労者」受賞祝賀会 ホテル丸治、出席一〇一名盛会。
五	二二・二七	
五	八	
五	九	
六	九	
六	二一	
七	二四	
七	十	
七	十一	
八	十一	

平成三年

四	四	四	三	三	三	二	二	一
二二	二二	十九	二四	一八	四	一七	一五 一七	二八
第十一号連盟会報打合せ、上野文具、出席者六名 原稿依頼、四十周年誌について。 第八回女流展 栃木開館二階ギャラリー 出品点数一〇六点、出品料千円 実技講習会 ホテル丸治 講師 日展審査員松下芝堂先生。内容別記。出席者七五名 懇親会出席者三六名 第三会幹事会 ホテル丸治、出席者八名 平成二年度会務報告。平成三年度会員展、批評会、総会、会報、 四〇周年誌等打合せ。 四十周年誌打合せ、ホテル丸治、出席七名 発行までの予定検討。 四十周年誌割付、印刷渡し、書典会にて、 出席者大谷津、癸生川、久津美、諏訪、赤澤。 平成三年度研修旅行検討、出席四名。 第四回幹事会 ホテル丸治、出席十一名 会員展、総会、批評会、懇親会の順序と役割分担を決める。 第二回地区代表委員会 ホテル丸治 出席者二六名 平成二年度会務報告、平成三年度事業案、四十周年誌の進み具合 い、会員名簿、会費徴収方法等について協議。								

平成2年度 決算報告書

収入額 1,889,000円
支出額 1,793,278円
残 高 95,722円

総 会		83,945
展 覧 会	会 員 展	348,442
	女 流 展	91,231
会 議	顧 問 会	68,314
	地区代表委員会	127,280
	幹 事 会	126,116
研 修	実 技 講 習 会	244,738
	見 学 会	81,116
会 報		119,600
通 信 印 刷		225,210
40周年記念 準 備		100,000
繰 越 損 失		122,580
雑 費		54,706

平成3年度 予算案

収入額 2,000,000円 4,000×500
95,722円前年度繰越金
支出額 2,095,722円
残 高 0円

総 金		120,000
展 覧 会	会 員 展	350,000
	女 流 展	100,000
会 議	顧 問 会	90,000
	地区代表委員会	150,000
	幹 事 会	120,000
研 修	実 技 講 習 会	270,000
	見 学 会	100,000
会 報		140,000
通 信 印 刷		270,000
40周年記念 準 備		200,000
会 員 名 簿		150,000
雑 費		35,722